

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日第三種郵便特許
昭和十二年五月一日發行
第十四卷第五號(每月一回一日發行)

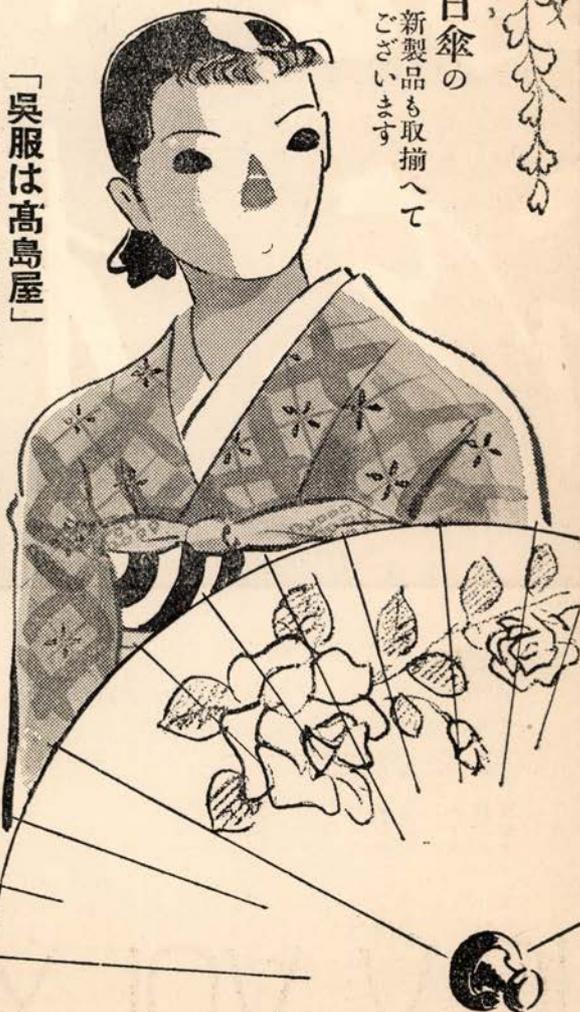
川柳の
証物

NO. V VOL. XIV

初夏の装ひ



日傘の
新製品も取揃へて
ございます



「呉服は高島屋」

いつも斬新な「柄行」
精撰優秀なる「品質」

夏の御装ひに……

長堀店……二・三階
南海店……四・五階



營業時間

◆ 店堀長 午後六時迄

◆ 店海南 夜間九時迄

月曜日 休業

高島屋

長堀店 店海南

大阪橋堀長・大阪なば

(順はるい) 々人の係關社

不朽洞會員
橋本綠
高橋かほる
福田山雨樓
西田山雨樓
永田里十
山本丹
生田翠
★田翠
夢路

資助員
池澤樂
長谷川一
大田道弘
岡本直一
片岡直方
笠原路生
嘉納純
田中辰二
長崎柳秀
長岡半太
長野晴濱
長野岩三



岩崎柳路
北山悟郎
水谷新美
朝田新水
姫田夕鐘
村松夕裡
市場没食
吉田食
妹尾變人

國枝史郎
藤村卯之助
藤本退藏
赤原清司
赤田清一
末弘殿太郎
客員
伊藤彦造
伊藤一三
鳥山一三
沖野岩三

川柳雜誌社

主幹 麻生路郎

大西八歩
須崎豆秋
春元紀太
松下小柳子
松田小柳子
後藤青兒
宮岡白峰
明石柳次
石曾根民郎
近藤勇

大島濤明
大谷五花村
大西長三郎
小川武
龜井晟修
川上三太郎
川村花菱
米村あ入馬
田村孝之介
谷脇素文
生方敏郎
高尾亮雄
窪田銀波
安川久流
前田雀
前田五健
食谷南
柴谷宰二
築原春雨
篠原春雨
藤里好古
小林不浪
森東魚

事幹と部支

廣島支部(廣島市)	兵庫支部(神戶市)	臺中支部(臺南市)	十三支部(大阪市)	竹原支部(廣島縣)	伯耆支部(鳥取縣)	光笑支部(廣島縣)	今治支部(今治市)	今里支部(大阪市)	光輝支部(大阪市)	西條支部(愛媛縣)	大鐵局支部(大阪市)	松江支部(松江市)	御池橋支部(大阪市)	鶴町支部(大阪市)	天王寺支部(大阪市)	御旅支部(大阪市)	松山支部(松山市)	京取支部(京都市)	鳥取支部(鳥取市)	京都支部(京都市)	阪都支部(京都市)	田邊支部(和歌山)	盤ヶ池支部(大阪府)	梅知支部(大阪府)	高知支部(高知市)	函館支部(函館市)	神戶支部(神戶市)	九三會支部(大阪市)	道頓堀支部(大阪市)
濱田久米雄	宮崎陽幸	宮内耕人	淺野牧人	松井可笑	三嶋美笑	永田里十九	月原宵明	市塲沒食子	竹内機見女	荒井英賀夫	山本喜山	勝谷山川兒	西岡いわ	須崎豆腐	宮崎白峰	江戶みづる	酒井鐵次	中島柳次	明石綠之助	尼崎左馬	辻流介	笹流介	水谷鮎美	國澤春水	龜井晟修	北山悟郎	庄萬よし		



川柳雜誌 五月號目次

題字・路郎筆

文苑

川柳名句評釋……………麻生路郎…(一〇)

武玉川三編研究(五)……………梅本秋の屋…(一六)

川柳職業人問題の序曲……………森東魚…(一四)

ざつびつ……………蛭子省二…(一三)

得手勝手……………麻生 霞乃 北窓 遅春……………安川久流美

街の横顔……………須崎 豆秋 同雅號は改號を……………山本 葉光

ダレシヤムと誠……………石田 沐天

川柳指導講座……………塚越 正光…(二三)

漫畫セクシヨン 與太節句……………小川 幹 武夫…(二三)

オサカマンガ・トリオ

桶口ヒロム

行路集(短歌)……………長野晴濱…(三)

湖南と好尚……………高尾亮雄…(三五)



俗世間から……………小林茗八…(四六)

川・協の頁…………………………(三七)

汐の宮吟行…………………………(一七)

川・柳・書・架(六五)……………(一六)

川柳横町……………不死鳥…(三)

創作

川柳塔……………麻生路郎選…(一六)

近作柳樽……………麻生路郎選…(四)

日本名所名物川柳 (京都の巻)……………山川紫明選…(二三)

一路集 浪人……………朝賀大鱗畫…(三三)

襟足……………小林不浪人選…(三八)

……………山本丹路選…(三九)

各地柳壇…………………………(四八)

柳界展望…………………………(四二)

柳誌要目…………………………(三四)

編輯縦横…………………………(五四)

社關係の人々…………………………(一)

川・雑・案・内…………………………(四四)

樽柳作近

選郎路生麻



男みなモシヤくくくと悼みけり	大阪	石田	沫天	春日遅々として電話話中ばかり	同
バツと咲きバツと散るもテンボかね	同	同	同	俄雨本を素見す客となり	今治 長野 文庫
「惱みに答ふ」答へてくれて亦惱み	同	同	同	業も成り名も遂げ謠本を積む	同
趣味と謂ふものを知りたい成り上り	同	同	同	修養書外れ枕のそれのごと	同
目に青葉カンく帽子殺虫劑	同	山本	三巴	古本に曰くあり氣な葉あり	同
子にたよる事を相顧みて罷め	同	同	同	御路樹を借つて繩飛二人でし	大阪 加藤ライト
完璧を期す慾望の鑿を執り	同	同	同	乗換がいつしよ年寄うまが合ひ	同



探照燈雲のうすさもよく見えて	同				
連れて来てやればよかつたスベリ臺	同				
激論を断つてサイレン長う鳴り	大阪	阿部	閑生		
假縫ひが来て焦げついた自炊鍋	同				
ちやぶ臺へ頼杖ならぶ花疲れ	同				
表情の無い妓遮断機へ止り	廣島	植山	九天		
凱旋の勇士蝶々を見つけたり	同				
藥瓶すてろと榮種咲きほこり	同				
資産はなしこの健康に恵れて	大阪	小塩	靜路		
はつきりと言へぬ卑怯な瞳は逃げる	同				
復々線のその踏切を待つ自分	同				
宮城も拜まず家出歸される	大阪	柳	大門		
食堂の見本の前で妻を待ち	同				
附添ひにまたもたれてる受験生	同				
洋食を切らして一人で酌いで飲み	今治	渡邊	曉童		
十二月金屬性のクシヤミをし	同				
愛をもとめる指の表情	同				
オートバイ音をつゞけて故障あり	名古屋	星野	兄兒		
かゝるとき吃る言葉は疑はれ	同				
タクシーのばたんと乗せた値が決ま	同				
一錢で納まる聲を持ってあまし	今治	文	公		
機關を焚く眞剣な顔笑はれず	同				
月給が高いと云ふは母ばかり	同				
大漁へ子の手が招く海女の胸	廣島	野田	昇玉		
迷ひ子の母へうれしい擴聲機	同				
先に行く帆はむつまじく箸をとり	同				
隠れんぼ遠く大根の花盛り	金澤	安川	郷美		
念入りで磨いた靴で革ふむ	同				
眼かつらにどうせわたしは低い鼻	同				
體温器はさんでる間の神妙さ	大阪	秋山	古心		
人絹に見えぬと妻は微笑めり	同				
靴磨き子が手傳つて呉れる朝	山口縣	三原	狂路		
ベッドから雲の變化を見てゐたり	同				
自轉車のベルが二人をまごつかせ	大阪	今井	菊路		



- | | | | | |
|------------------|-----|-----------------|-----|-------|
| 電話口 姑別な聲になり | 同 | 注射する術も覺えて父は病む | 愛媛縣 | 由利 孝輔 |
| 工事場の春を戸板が擔がれる | 廣島 | 前を行く人と歩調が合つて居た | 同 | 同 |
| 女教師の柄變へて來る春霞 | 同 | 病むことの罪に服役するころ | 大阪 | 川村 觀月 |
| しれたものと云ふ米代へ 必死なり | 愛媛 | 解散にして先生等のむ話 | 同 | 同 |
| 亭主又言ひ損ひを突込まれ | 同 | 雨に遭ふ事も豫定の帽子選る | 北川 | 春巢 |
| アドバルン 春の霞へとろけこみ | 大阪 | どの顔も戀をしさうな夜の銀座 | 同 | 同 |
| 女房も いける口なり 花見酒 | 同 | 塵芥ひとの捨ててるところへ捨て | 兵庫縣 | 田邊 由布 |
| どれ何處と老眼鏡をかける母 | 兵庫縣 | 大阪を見降す窓の ライスカレー | 同 | 同 |
| 朝粥の温みがのこるたなごころ | 同 | 愛の巢は郊外にある靴の泥 | 大阪 | 正本 水客 |
| 逆らはぬ水と行衛を共にせん | 大阪 | 湯は谿にあふれて梅の咲残る | 同 | 同 |
| 阿呆らしさ二の矢は暫し放すまい | 同 | 茶の花に笑ひ初めたる子を抱きて | 大阪府 | 大阪 形水 |
| 轉住は驛二つほど故郷へより | 今治 | 老 船員 心齊橋の 晝歩く | 同 | 同 |
| 藝人が藝人を見てほくそ笑み | 同 | 嬉しさは枕元なるランドセル | 奈良縣 | 嶋田 翠峯 |
| 相手によつて告白の相違 | 松山 | 女の子ばかりで屋根がぬけそうだ | 同 | 同 |
| いづれ赤字呑む相談にも應じ | 同 | ストーブの外は嚴しい風があり | 丸龜 | 馬場 浪二 |
| 蜘蛛の巢の如き頭で近代女 | 今治 | 寒稽古恩師の子供 拗ねて出る | 同 | 同 |
| 風呂の中思ひ出せない顔が浮く | 同 | 春風へふんはり飛ばす袂糞 | 松江 | 田中都之介 |



地久節愛國章を強ひられる 同

共稼ぎとは男性の不甲斐なさ 大阪 馬淵 龍城

優柔不斷にして勤続十年 同

我々は四月の土の色をみた 長野 金井有為郎

アルバムの笑つてるのが死んだ人 同

描眉毛胸のあたり、のうづく朝 今治 岩本 芳岸

描眉毛乙女心をおそれたり 同

居たのかと留守を覺悟の春の客 神戸 岡田 某人

世に逢はずユーモリストと名付けられ 同

満員のブレイキ荒い音を立て 大阪 岩橋 岩石

眞剣な願ひ素顔のまゝで来る 同

恥云うて父朗かに飲んでゐる 尼崎 酒井 斗風

静脈の青さを見つめ孤獨なり 同

我慢しろとはきつい父性愛 兵庫 酒井美知夫

ペンキ屋の返り血あびた様な春 同

溜息の出るサラリーを持ちかへり 朝鮮 村野東狂子

薄給へ犬馬の勞を誓はされ 同

その世辭は半分ばかり割つてきよ 大阪 畑田よし江

見送りの乗つて行きたい梅田驛 同

振付はどなたですかと女人振る 同 千草 豊

啼きまねて小鳥と遊ぶ日曜日 同

御詠歌がうまく入齒がよく目立ち 同 神戸 一葉

迷惑な茶室へ記者は招じられ 同

肩上也あさくはたちを越えんとす 同 垣崎 貝一

あをい翼にのつて逃げたる戀よ戀 同

行軍の聲塀を越し窓を抜け 廣島 一 成

新婚も遺骨も同じ船に乗り 同

新妻の鏡に立てば春の風 今治 荒井英賀夫

春を待つものに土筆も蛙も居 同

こんな時笑へば損と知る日なり 大阪 庄司淡路坊

月始めみんな拂うて借りて来る 同

遺言をする身でもなし借家に居 朝鮮 高原惡源太

口答へやめて口笛吹いて立ち 同

自分だけ一番苦勞したつもり 大阪 米林 舞蝶



厄介な事に人間風邪を引く 同

牌の音夜明になつてまだ續き 廣島 靜 人

此の子がどうなるなんて年寄くさし 今治 満田都留逸

モーシヨンをつけ空財布母へ投げ 長野 佐二木千隈

春うらゝ戀のコースを踏む男女 大阪 高畑案山子

鬪す袂に春をよんでゐる 廣島 悟 柳

養生が目的ですと竿いちぢり 大阪 畑田 炭車

ビル街を下駄で歩けば良くひゞき 廣島 井上 満呂

除雪夫をからかふ様に雪が降り 朝野 齋藤不夜城

見舞状俺も臥てるは哀れなり 兵庫 戸倉 晋天

警笛に列を亂した目高たち 松江 村田 牛歩

特價品買はねばならぬ家でなし 京都 福田 丁路

一冊も買はぬに雑誌目録來 廣島 千 也

厚司着て軽い負擔を感じてゐる 島根 米原 木馬

忘られた碁石の白も春の部屋 熊本 寺田 宗正

確心を促へて朝の湯にひとり 石川 松嶋みどり葉

身代は出來たが矢張り伊勢屋也 高松 揚 柳 夢

朝風呂へ自分一人の湯がこぼれ 石川 松本 文大

外交のうまい役者の合マント 今治 菊池 香方

氣は心机の位置も變へて見る 廣島 島生 桔佛

病む母と寝て病む母の夢を見る 大阪 山本 葉光

春の陽淡く君のあたりに 高松 寺本 嵐峰

青春を地味に社則に押へられ 長野 高峰 柳兒

買ひ立ての靴へシト〜〜と雨 朝野 豊島石燈籠

悪友はいつものとこで待つ電話 大阪 西端 南天

かき餅の下で三味線など鳴らし 尼崎 山田南瀧路

叱られて寝た子の夢も樂しかれ 岡山 原 美靜流

休日庭へ女房の下駄を借り 尼崎 尾代 晋子

酒斷つてお嫁を貰ふわけなし 松江 勝谷山川兒

兒を連れて一人淋しい春の旅 大阪 宮阿 公子

縁談に背いてからの引眉毛 大阪 金井 串郎

やがて咲く櫻へ飲む日決めて置き 愛媛 今川 椋影

貧困へ春が來てゐる猫柳 鳥取 林 小判

ほうれん草少し崩して通夜の席 長野 林 幹



初午の太鼓ひつきりなしにうち 大阪府 大島 錦溪

金礦の話三人の顔猿に似て 朝鮮 桂 閑々坊

義兄弟いつそ他人が親生まれ 愛媛縣 鷲 野 榮

うらゝかな日和隣へ聲をかけ 大阪府 黒川 紫香

火を吐く山へ登る愛情 大阪 山本佐一郎

母の背に子のうれしさは唄うたふ 尼崎 坂井 正胤

合格の嬉しさ石をけつて来る 石川縣 山崎 晴嵐

川柳指導講座

講師 塚越正光先生

本社の指導講座は平易懇切、全く手を取らんばかりにしての講座振りです。

川柳を作りたいが、どうしたらいいかと迷つてゐる閑に、五七五中心に、課題によつて作り、本講座へ送られるが捷徑です。講師はこの道の苦勞人、塚越正光先生です。

課題「猫」一人一句

締切 五月廿日
發表誌 七月號
投句 本社宛

「川柳指導講座句稿」と明記する事

本號では沐天、三巴、文庫、ライトの諸君が譽を並べて躍進した。沐天君の「男みな『惱みに答ふ』など同じ穿ちでも新味がある。古蒙三巴君に「子にたよる」の苦勞人ぶりの句「春日運々さして」の輕妙さがあり、文庫君には「薬も成り」の悠々さして世を睨む句がある。閑生君の「假縫ひが来て」は微笑まされる句、金澤の郷美さん、「眼かつらに」の句に皮肉味滑稽味を横溢させた手際は流石に父の血を享けただけある。本號は前號に比して更に佳句の多いことをよるこぶ。殊に二句組に落ちつきのある作品の多くがあることもうれしい。(路)



川柳名句評釋

(10)

麻生路郎

白粉の下は光陰矢の如し

史城

皴、皴、ちりめん皴。悲しくも又いたまじきは現實。水谷八重子さん、覺悟はよいかと云ひたい。

煉齒磨女房の押した後を押し

紅壽郎

新世帯だネ。圓滿だネ。サラリーの上がることに希望を繋いでゐるんだネ。ねえ、あなた、ぶぶ漬で辛抱して頂戴よの口だネ。

馬の目ご出合新兵ぎよつごする

あけ鳥

「オイ新米、一體何處を蹴るんだい。無闇に蹴つたからつて、走れるもんぢやないよ」と云ひたそうな馬の目に射す

くめられた新兵のみじめさがハツキリと描出されてゐる。

日の永さ思へば古き掛時計

榮公

春日遅々たり矣。ああ眠むい〜。人間は何故生きねばならないのか。それに答へやうともしないでチクタクと古時計は時を刻んでゐる。

神様を又取りかへて願を掛け

苦味平

そりやア、石切さんがエ、と云へば石切さんへ走り、妙見さんがい〜と聞けば妙見さんへぬかづく。人間の弱いこと、ホントにお氣の毒みたいなもの。

錦魚屋に離妓袂を教へられ

柳秀

祇園の晝は長閑である。錦魚の美に眼を奪はれる舞子の無心な姿こそ京の姿そのものではなからうか。

よこれずにあれご少女をみまもりぬ

天邪鬼

美しき乙女をみまる人に邪心なきか疑はし。されど、斯く感ずるのが世の常の男ごころではある。ああ。

トラツクに積むご嫁の荷みじめなり

樂瓢

美は影をひそめて、一枚の油團に過ぎない。一臺の貨物でしかあり得ない。この句見つけどころの妙味か。

揺れてゐる心秤の目が合はず

信子

揺れてゐるのは秤でなくて、ここらだつた。人間のこころはホンの一寸したことに動揺をまぬがれないものである。

シャツも着て寝るよご友は年をこり

孝三郎

前途に一脈の希望がないでもないが、それは債券の當籤を待つにも等しいと感じるやうな年になつては總てが物臭

さとなる。シャツも着て寝るだらうし、齒ブラシを濡らさぬ日さへあるだらう。そうした友を見ることは自分を見ることでもある。

俺もよんごころなくやるストライキ

半里宇

「どうしてストライキなどなさるの？」

「つき合ひさ。」

「ストライキまで」「そうさ。五人も子どもを抱えてる連中のことを考えりや、俺だけがイヤだとも云へないぢやないか。」

手袋を女は叩きつけて去り

翠夢

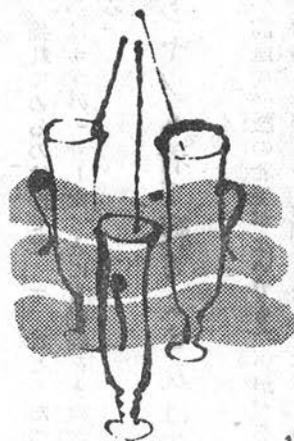
イヤです、イヤです、わたしはイヤですと女の怒りは解けるべくもない。

女は遂々去つた。しかし女が男に叩きつけたものは手袋にすぎなかつた。

鉛筆の女の手紙憐れなり

犇郎

しどろもどろに鉛筆の走りがき。すてゝ置けば、此の世のものではなさうな空気が感じられる。



新語の攝取法

川柳指導講座「サラリー」

塚越正光

外國語を日常語に消化することに些の潔癖さをもたない現代日本に住む私達は、新語を一通り覚えることだけでも一昔前の川柳人から比較すると、川柳心を養ふ仕事が増えてゐる譯だが、新語辭典を一冊持つてゐても次次に増える新造語の數は、却々新語辭典位に頼つてはゐられない、第一新語辭典をみんな記憶する譯には到底いきつこないのだから、そこで私達は何うすればものを讀むにも、話を聞くにも間違つかない程度に新語を攝取する事が出来るかと言へば、新語メーカーたるデヤアナリズムと常に四つに取組んで居ることが肝腎だといふことになる、といふのは新聞や雑誌を無駄に讀み過ぎて仕舞はないで、私達の川柳心を養ふ、テキストとなしきることである。

こんどの課題「サラリー」はもう新語の部ではないが、一昔前なら「給料」「俸給」或は「月給」等であつたらうがそこに時代を意識しない譯にはいかない、で私達の先輩の句即ち參考資料となるものには、極少ししかない私の手許のものでは「サラリー」では求められなかつたが、

昇給は順調にして五十圓 鶏牛子
 月給もやれない人を使つてる 緑 雨
 來月の月給それも頼みなり 太郎丸
 こんな月給でかうして暮し行く身 松 窓
 等は「サラリー」をテーマとしたものとしてよいと思ふ
 「給料日」を詠んだものでは、
 給料日長い手紙を書いてゐる 鮎 美

家の灯があかるく見える給料日

静波

月給日妻に言ひ負かされて無事

日眼子

等がある、「サラリーマン」では

商人にサラリーマンは羨まれ

丹人

がある。私も俵給生活十五年に及んでゐるから「サラリーマン」の句がない筈はないと思ふのだが、どうしても思ひ出せないで、そのまゝ諸君の句の検討に移ることにする。

退社時サラリー順に顔が消え

下のものが歸れないだらうからといふ上役の心づかひはうなづけるが、それをそのままでは曲がないし、退社時と顔が消えと同じ様なことを上五と下五に置くことも何うかと思ふ、それを整理して作家の感懐を挾めば單なる報告から一步進んだものとなる例へば

サラリーの順に昨日も今日も退け

とすれば、單調なそして退屈な勤人生活が描き出せる。

(句主 今治市 向上庵君)

サラリーへ先頭百足の口に見え

俵給袋を貰ひに行く列を詠んだのかも知れないが、餘りに獨斷的な言はねばなるまい、だがそのサラリーを貰ふ人々の列から百足を聯想した句主の感じ方を尊重したいと思ふ、そこで敢て添削をせずに句主の再考を促すだけにとどめよう、(句主 今治市 河鹿君)

月給を貰ふ朱肉の美しさ

捺印されたそれではなく肉池の美しさを句主は感じたのであらうか、若し前者なら

月給を貰ふ認印を別に持ち

と傳票のと違ふ認印(みとめ)を捺す眞面目さ、いやむしろ堅苦しさかも知れない……を叙す手もあるし、後者なら月給日肉池の凹みなど均らし

と樂しさ……中には右から左へで樂しさを持たないのもあらうが……を詠つてもいい(句主 丸龜市 浪二君)

サラリーの半分さらつと酒になり

獨身サラリーマンの痛飲ぶりを詠ふにしては何か物足りなさを感じさせる、そこで

サラリーの半分その夜酒に化け

と馬鹿馬鹿しさを強調してみたらどんなものだらう(句主 高松市 廉人君)

百圓の社員を望む女學生

百圓のサラリーを望むのは敢て女學生ばかりではない。サラリーマン自身でさへそれを望んでゐるのが時世である

だが何とそれ以下の多いことよである。近頃の娘がサラリーマンへ稼ぎたがるのは百圓のサラリーより、朝出勤して夕方帰宅する生活、そして日曜祭日にはアベックで外出出来る樂しみを持ちたいからであると斷言出来る。

百圓の社員を望む嫁の口

なら一般結婚適令期にある娘達のそれとして範圍が廣くなるが、句主には女學生の方が魅力があるに違ひない（句主 大阪市 煙香君）

昇給のサラリー袋へ皆んなの眼

昇給したことが社内へ揭示されるあともあるまいが、自らの嬉しさがみんなの眼を感じることはあり得やう、だが昇給第一回の月給袋より辭令にこそ嬉しさがありはせぬかしら、だが重點を月給袋に置くとすれば

昇給の月給袋たしかめる

と昇給の現實を一刻も早くたしかめたい氣持を詠つてみる手法もある（句主 島根縣 さわだ君）

食卓に尾鰭のあがる月給日

貫祿があることを尾鰭がつくとも言ふが尾鰭があがるとは言はない、魚自體のことなら尾頭付をかしらつきといふ成語がある、それを解して

月給日食卓に待つ頭付き

とかしらつきを買つて待つ母か妻の心づかひを詠つてみた（句主 朝鮮 芳堂君）

サラリーとくらへ淋しい腕をなて

價値以上のサラリーを買つてゐることに淋しさを感じてゐるのではあるまいと思ふが、さう思はせるのは淋しいが下五にかゝるからである、そこで淋しいをサラリーにかければ

サラリーに不満があつて腕をなて

と淋しさを句面からなくして仕舞つてもよい（句主 山口縣 宙芥君）

サラリーは言はず會社の自慢なり

この心持をいつまで失はなければ優良社員の名を冠してもよいが、いつかサラリーの不平は會社の惡口にさへなるのが常である。

サラリーは言はず會社の名を誇り

と下五へ筆を入れたのは自慢なりではあまりに粗雑さを暴露してゐるからである（句主 朝鮮 惡源太君）

サラリーを何回となくなてて見る

月給日の彼氏が我が家へ歸るまでの心持とすればボケツトのサラリーへ又觸れてみる

こそその在り所まで明示してみるのも面白いとは思へないかしら（句主 大阪市 華人君）

いくとせきこのまゝ行くや我サラリー

十年一日の如き我サラリーへ詠嘆としてもありのまゝでは曲がない

我サラリーへ逢なる人生苦

では調子定型律でないが一気に續下すときびたりときまりがつく（句主 大阪市 太輔君）

洋服の着こなして知るサラリーマン

サラリーマンと言へば洋服はつきものであるから

着こなしもサラリーマンの板につき

で洋服を句面から抹殺してもそれと知れる(句主 高松市 柳夢君)

サラリーマンの袋を給仕ためてゐる

自分のサラリー袋をためるなら敢て給仕に限らない却つて一サラリーマンの家庭内の出来事の方が面白い、他人の袋なら給仕が生きるのだが、それは現實から離れ過ぎる。

(句主 大阪市 水客君)

サラリーは上れば上つたて足りず

これをもう一度推敲すれば

昇給を待つてたやうに金が要り

と言ふ句が生れる筈だが、句主は骨惜しみをしたのか、

一步手前で止つたかであらう(句主 長野縣 幹君)

サラリーに階級のある生活向

社宅に住んでといふ前書でも附けば成程と恩はせること

も出来るが、ただそんな見方をするだけなら

サラリーのけぢめを社宅見せてゐる

ぐらゐのところがよくはないかと思ふ(句主 山口縣 悲戀坊君)

戀坊君)

御近所の噂サラリーにまで及び

これでよいと言へるが中七音が八音になつてゐるのが私をして首肯せしめないのだ

御近所のサラリーにまで口が過ぎ

と口調を整えたが低調であることは辭めない(句主 大

阪市 春集君)

サラリーの書房へ足のむきにけり

このサラリー月給と置き換えてみるとこの句の構成が變であることに気がつくであらう

サラリーが書房へ足をむけさせる

ならそれでよいのだが

本買ひに一足のはす月給 日

と全貌を變へて仕舞つても句主の言はうとしてゐること

になる(句主 神戸市 靜水君)

サラリーは隣の方が少し上

おやさうですかと言はせるだけでは、私達が川柳する價値はない。要するに再考して貰ひたいのである。この句と言ひ、前述の「これ程の」と言ひ今月は句主名がないのが

二句もあつたのは句主の注意が足りないのか 私を試さう

といふ悪戯か?

以下の六句はこんどの集句中での本欄卒業と見做すべき

作品である。

サラリーを持つて見舞に來て呉れる

月給の手前やつぱり奢らさる

サラリーと云ふ正札を付けられる

サラリーへ赤字の續く新世帯

サラリーも不平を言つて無心状

紫 香
凡 徹
東 狂子
葉 留路
椋 影
葉 光



川柳塔

路郎選

冬帽にかるく疲れた踊の灯
 鋸がまにあふ春が暮れかゝり
 微温湯熱ある次女の鼻ひくゝ
 春の灯に酒饅頭が蒸しあがり
 灯のいよゝ旅の夜にする
 波よせてきて防波堤淋しがり
 座ぶとんをはなれ勝ちなる春の風
 兵子帯も心もゆるむ宵を行き
 信貴生駒霞む蟄居の窓を開け
 出たあとの男の禪思ひ見よ
 酒呑めず日中に枕抱へ込み
 妻と出てなかく金を使はさず

兵庫 水谷 鮎美

同

同

同

大阪 大西 八歩

同

同

同

大阪 西田 紳樂

同

同

同

川・柳・書・架 (六五)

二 昭和川柳百人一句

宮尾しげを書並編

▼本書巻頭には岸本水府君の序文がある。その一節に「それに姿が寫真と違つて、しげを君獨特の特徴を巧みに捉へた漫畫であるだけに一層いゝ」云々

▼編者宮尾しげを君の「跋」に

本編は先に出した第一編にもれたところの明治、大正、昭和の川柳作家に新進を加へて出來た。しかし、これを以て完全とは云へない。第一編にも述べた如く、この仕事は手と共に足が働く爲、不本意であるがやむを得ずの所が多々ある。この點は御諒承を願ひたい。(以下略)

▼昭和十二年四月三十日發行、和綴四六版二〇四頁、非賣品、發行所東京市豊島區巢鴨六丁目一二九〇宮尾重男方小咄研究会

絹すれの間違ひもなく古き妻

松本 石曾根民郎

算盤に夜はなだめられ齡を知る

同

春の雨妻のかくせし智慧聞かむ

同

砂針へつめたい夢は逃げ去つた

同

人絹を買ひ團參の先に立ち

大阪府 妹尾 變人

二女入學

サイタ、サイタ父の晝寢の邪魔をする

同

轉動して

植ゑかへの土に生きゆく根をはらん

同

わがまをゆるして友は送るなり

同

アメリカの繪本レヴューの幕開らく

大阪 中西おさむ

お座敷の廣さの中の舞扇

同

雲水の心おきなく雨に濡れ

同

靴下ろすくそよ風匂ふ

同

普天兄へ

枝ぶりへ未練も持たず一欵

大阪 北山 悟郎

人間と氣附いて見るも面白し

同

見込まれたとかで兎に角式をあけ

同

▼編者が漫畫家であり、川柳家であるところに本書内容の特異性を發見することが出来る。

吟 雨の汐の宮へ

四月廿五日、最終の日曜を道明寺から玉手山、それから汐の宮温泉へ吟行を試みることになつてゐたが生憎雨にたゞられて、道明寺の天神様へは車中から合掌して汐の宮へ直行した。

一行は路郎、豆秋、新水、いわを、かほる、艸樂の六人、一ト脚遅れて來るといふ里十九のために、告知板へ白い文字を残して來た。

沿線はすっかり新緑、汐の宮でも、もう葉櫻のすがすがしい姿に變つてゐる千代田橋際の温泉ハウスへ落ちつくなり艸樂と豆秋がザル碁をはじめた。路郎や新水やいわをは温泉へぶらぶら出かけた。碁には興味のないかほるが酒の來るのを待つてゐるのも淋びしい姿だ。雨は霽れたが、人出の尠ない汐

心靜かに病めとは君の肺三期 同

卒業をして伊達巻もほしくなり 大阪 後藤 青兒

家出すれば塙に歸る鳥あり 同

僕一人乗せて走つたバス三里 同

赤ん坊の欠伸へ春の陽があたる 都 明石 柳次

出る時も戻つた時も寝てゐる兒 同

賑やかな葬式だつた足袋をぬぎ 同

郊外へ押かけて行く春霞 大阪 橋本 綠雨

アドバルンあそこにも一人日向ぼこ 同

銀嶺を急行で見える美しさ 同

花の寺酔へば祈願の身も忘れ 大阪 麻生 霞乃

スキートビーの弱さ突支棒が要る 同

ひとすじに歩るく道也人を見ず 同

來賓はリレー忘れた走りやり 兵衛 長崎 柳秀

顔なじみ女給は寄つて飲んでくれ 同

みんな出た後の靜かな流しもと 同

田舎道信心の足が軽いなり 同

田舎道たまには來いと女云ひ 里十九

田舎道大きな顔で手を握り 同

田舎道村は總出の道普請 新水

汐の宮

汐の宮碁盤をかつき橋を越へ かほる

碁に勝つてやとなをおごる汐の宮 同

青空の下の句會

五月九日第二日曜

▼あはただしい都會生活、濁流に泳ぐ

柳人たちのために、毎月一回「青空の

下の句會」を開くことにした。大阪の

近郊でなるべく経費のかゝらぬところ

を選むことにした。その第一回は第二

日曜に城北公園の植物園へ足を運ぶこ

とにした。參會者は午前十時迄に天橋の京阪電車の乗場へ集合されたい。「青空の下の句會」も特に案内は出さない。雨天中止、小雨決行。兼題「宿」「山吹」各五句。幹事（新水、艸樂、いわを、おさむ）

獎推 士博學醫林楯
 査監 士博學醫瀨片

錠ムーユシルカダブ

安産

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母休と胎兒の保護榮養に任じ、悪阻期を安全に経過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますから、胎兒の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の悪化を防止し、乳兒も随つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀨醫學博士述「安産のために」通呈

の
 た
 め
 に

代時ムーユシルカ
 てし設建を

茲に二十年、幾十萬の妊娠婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は、弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
 「ワダカルシユーム錠」



店商助卯田和 町修造坂大

漫画ヤンチャン

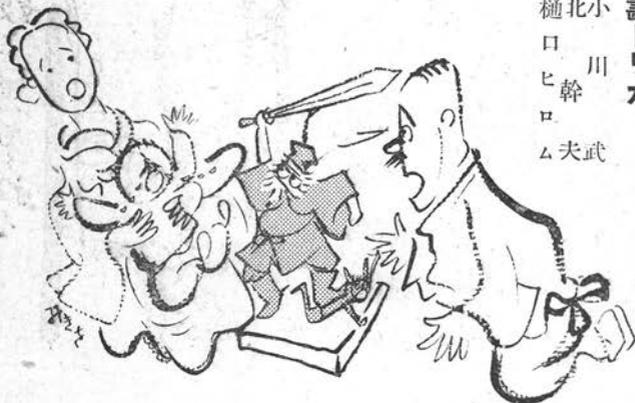
よたせつく
與太節句

漫畫トリオ

北小川 幹武
樋口ヒロム

(一) 紙風號墜落?

鐘馗さま「一家の内で飛行機遊びは
ゴリヤシヨウ氣の沙汰ぢやナ
イツ」(武)



↑ (二) 物も使ひ様で
「坊やがびつくりしてゐるワ……金太郎
さんでも買つてくればいゝのに……」
「當分借金取除けの呪ひに玄關へでも
飾つて置か……」(みき丸)



(三) 鐘馗代理

應援團長の弟
「兄ヤンチャ。鐘馗さんのお人形が壊
れ、から鏡を置いて……アツアアそ
こに居てヨ丁度イヤ」(ヒロム)

(十) 芋 棒

年寄の舌へ芋棒とけて来る
 芋棒でほろりと酔うて京の風
 膝組んで芋棒の味時雨する
 俄雨芋棒へ来る二人連れ
 芋棒に時雨の京を後にする
 芋棒に江戸つ兒の氣をやわらげる
 平野家へ後朝と云ふ二人づれ
 夫婦ちと老けて芋棒好きに成り
 芋棒で晝の陽さしをよけて飲み

山 朝
 川 賀
 紫 大
 明 鱗
 選 畫



柳 柳
 月 月
 童 童
 期 期
 馬 馬
 男 男
 二 二
 不 不
 好 好
 其 其
 陽 陽
 出 出
 蛇 蛇
 麿 麿



町・横・柳・川

大連の月南夫
 人が逝く、仁川
 府の可宵夫人が
 亡くなる。「南
 無女房乳をのま
 せに化けて来い
 」の古句を舌の
 上に乗せてしみ
 くさ味ふ。

☆

漫書トリオの

ヒロムが出世して

東京へ行くことになったので路郎が東京に
 縁の深い竹葉で送別會を開いた。艘上りに
 出世するやうにこの心づくした。頃は大き
 に鯉のぼりの泳ぐ時、汽車は各等急行の上
 り東京行。

☆

車中で立往生のまゝ前夜交雑大會へ出た
 東魚と路郎は名古屋へ着くさずぐに驛の食
 堂でガソリンを詰め、機械の手入を怠らな
 い。大山城で一行が記念撮影をやらうとす
 ると二人の姿が見へぬ旭映が探しに行くこ
 櫻の下の掛茶屋でガソリン嬢を相手にガソ

日本名所 名物川柳

(京都の巻)

夕飯に早く芋棒灯がはいり
芋棒を出た圓山の薄赤さ
平野家の因縁話爛けさせる
芋棒の晝に雅號の人が来る
京に住み芋棒知らぬ暮しなり
芋棒で酔ふ京言葉晝の雪
芋棒へ今撞いて来た鐘の音
芋棒を提げて仲間からはぐれ
芋棒へ今日朔日の本家なり
後場からの氣焔芋棒だけ奢り
芋棒へ落つく朝の茶を吸り
芋棒へ今日は飲めない人と来る
後妻でも連れて芋棒世帯じみ
芋棒の暖簾舞妓と寫される

一水 紫香 佐保 葉光 政信 案山 木履 双光 同 新水 同 同 同 二山

リンの補給真最中だ。
撮影が濟むさ又機械の手入れに走って行
つて残りの徳利をふつてゐる。二人は神風
號の飯沼、探越をつくりの奮闘ぶりだ。

☆

交驛大會の役員さん、喰べるものも忘れ
てよく働いた。その代り喰べさせるものも
忘れてブツ／＼云はれてゐた。

可香と来た交驛株式會社の社員みたい
な格好で大須ホテルの部屋々々を覗いて廻
はる。チップを上げたたくてもそんな失禮な
ことが出来なかつたそうだ。文芳、孝三郎
旭映何れもさま大車輪だつた。

☆

「きやり」と「番傘」が名古屋で正面衝突
杜若が奥方と御曹司を引具して一日早く奇
襲を試みれば水府は鳥語等を従へ居残つて
鎗をけづる。昔の關ヶ原はモ少し西であつ
た筈。

☆

交驛大會に、久良伎のやうにはじめから
缺席が判つてゐる人を選者に擔いだのさ、
選句を先に送りつけたために句會氣分が稀
薄になつたのは失敗だ。別に色男だとは思

はぬが選者の顔が見たいから出席したのに、出るのも出るのも若い役員の前で披露にはウンゼリしたと遙るゝ参加した柳人がつぶやいてゐた。

☆ 省線では名古屋駅から「博覧會前行」といふガソリンカーを運轉してゐる。それに乗つてホントに博覧會の会場前まで行つて一杯飲んで引揚げたのが路郎に唾三味に星文洞と案内役の孝三郎。場内の見物は山雨樓に一任。

☆ 川柳漫書を論難してゐる人があるかと思へば、川柳と商品の廣告とを結びつけて得意になつてゐる人もある。ごちらが川柳を冒瀆するものか分つたもんぢやない。

☆ 談せば判ると云ふ路郎から川・協の説明を一通り聞いた丸龜の浪二、ハアそうですか、なるほどそうですね、大いにやりますよ、イヤ呑みこみの早い事、ああ全国の川柳人よ。浪二を見習へー。

☆ 「葦乃が選をしに行きなばるか」を聞くか

ら、何んのことかと思つたら選挙のことだつた。なるほど選に違ひない。第四區は十立人つてゐるから行けば九人没、行かれば全没だ。「近作柳權」の選と比率に大差がない。「葉てるな一票」の宣傳もいゝが、もつと大選舉區にしないさ葉權する方が公

典雅な日本座敷



北理京 白蘭

土佐堀船町

☆ 平な場合がある。

☆ 一二がチビ／＼と飲む。飲むこに於いて寧ろリードしてゐた久流美はムシヤ／＼食ふばかり。これが最近の金澤だよりだ。寂びしき限りだ。(不死鳥)

柳誌要目 (三月號)

▼作句による「我執」の崩潰・堀口塊人 (昭和川柳)

▲川柳とは何か・阪井久良伎 (川柳俱樂部)

▲川柳への發展・石崎 柳石 (川柳みすか)

▲青年川柳作家論 (五)

鈴木小寒郎 (芥子粒)

▼川柳雜語考 (三)

頼原 退藏 (三味線草)

▼柳多留四編輪考 (二十三、二十四) 諸家 (三味線草)

▼川柳國名盡 (十三)

大田 秋水 (靜岡川柳)

▼靜岡名物川柳めぐり (三)

榎田珍竹林選・宮尾しげを畫

(靜岡川柳)

▼日常性について・鈴木小寒郎、視野

▲川柳の詩形と素材・松南香蝶 (川柳研究)

▼廣汎な諸勢力の綜合・品川陣居 (川柳きやり)

園子甲冑
東洋一 阪神水族館



阪神電車



武玉川三編研究 (五)

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(70) 石切の火か飛んてから猶寒し

省 二 石切とは、(一)山から石材を切出す者。(二)その石材を細工する者をいひ『石切の覺えた歌は辭世許り』は後者に屬す。原句はどちらにでも解き得らる。『石切は落葉の中にうつもれて』(眉・七)。『火を打懸る石工の臍』(眉・初)。私共が常にみるのは(二)の場合。火花の飛ぶをみて、ゾットしてから、一層の寒さを感じてくる。

秋の屋 石材を切出す方で、其方が石工よりも寒さが強く感じる。

東 魚 火といふ熱いものが、飛んだのに、却て寒い感じがすると云ふ點を、ヤマにしたのであらう。

(71) 正平紋に佗る大兵

秋の屋 正平紋は昌平紋と書いて、一に切附紋とも云ひ無地の衣服の背袖等に、他の布帛に紋をかいて、切抜いたものを糊で貼るのだが、人込の中で大兵の男が、他の人の衣服に觸れて、その昌平紋を破つた粗忽を詫ると云ふのである。

東 魚 佗るは、自分で佗しく思ふ意かと思つてゐた。

省 二 詫るは佗るの轉ぜしもの、句意はどちらにもとれる。若し「大兵」が大軍の謂とせば、物足りない不平氣味がありはせぬか。―『獸みせにすはる大兵』(武十八)の如く原句は、單に大兵の男でよい。

東 魚 矢張り體の大きい方であると思ふ。

(72) もしほ焼伊達はなけれと瓦かな

省ニ海藻を積むで焼いた灰に水をまぜ、上澄を煮て鹽を作る。和歌には風流なものとして、多く詠まれてゐるのが「もしほ焼」である。瓦窯には、そんな伊達は無い。秋の屋ニ謡曲の「融」の故事を、暗に含ませて有るやうに思はれる。

東 魚 伊達と云ふ言葉から「融」説が尤だと思ふ。

(73) 臍へりきみの廻る堪忍

秋の屋 心を丹田に落着けるのであるから、自然に臍に力はいはる、而して堪忍するのだ。

東 魚 句面に可笑味がある。

省ニ『腹立ちのあまりに帯がしまりすぎ』（不斷櫻）。そこを臍へ全努力を集中して、我慢する。

(74) 庄屋の産にほらの貝ふく

省ニ庄屋がお産をしたので、法螺貝をふいて知らせたのである。庄屋の權勢も判かる。事實あつたことと思ふ村の事は法螺貝で知らせたものだ。『庄屋が掛り湯すると法螺をふき』（古川柳)

秋の屋 海濱の漁村などには、斯る事實が有つたであらう。庄屋の産が珍らしい。

東 魚 庄屋の勢力が、昔は大いしたものであつた事が想像される。何となく可笑味があり、朗かな句である。

(75) 足輕の鞘鳴りかして電り

秋の屋 足輕の佩刀は、俗にがたくり丸と呼ぶ安物で、鞘ががたくりとなる。「電り」は、その刀を抜いた時にびかりと光る事であらう。

東 魚 夕立が來かけたので、馳足になる足輕の刀が、がたくり音を立てるのではないか。

省ニ鞘と身とが、ピツタリ合つてゐないから、振動すると音がするのを、鞘鳴といふ。電光がした爲、早足になつたから、腰の物もがたくり音がする。

秋の屋 兩君説の如く、雷に驚いて駈出すのであらう。

(76) 氣のもめる時はつき出す置炬燵

省ニ氣分が、いらだつて落ちついて居れぬ。置炬燵などは突出してしまつて、ふさぎ考へ込む。一戀の思案は悩みだ。

秋の屋 傾城夕霧が聯想される。

東 魚 居ても立つてもたまらぬ焦燥にかられる。置炬燵だけに、戀らしい心持ちはうかゞはれる。

(77) 百万遍にゆれる蓬生

秋の屋 大勢が寄集つて、百萬遍の念佛を唱へるので、其聲に蓬生の宿が揺れるといふのだ。羽生村の累の家らし。

東 魚 草の家で、百萬遍をやつてゐるので、庵も揺り動けばかり感するので、事實揺れもするのであらう。

省 二 百萬遍念佛は、淨土宗の隆昌につれ、流行する事となつた。―私は幼時、祖母に連れられ、ある尼寺で百萬遍の數珠繰りをした事がある。

(78) 灯笼に手間を入れてもあぢきなし

省 二 灯笼に手間を入れ、工夫をこらしてみても、あぢきない業である。「手間を入れても」を、一層簡単に、灯を點してもと解されぬ事もない。まことに物淋しい事である。

秋の屋 灯笼を作るに、手間を入れて、それが出來上つたけれども、一向に面白くも無い、といふのでこれは大方盆灯笼であらう。

東 魚 目出度い事なら、骨折の一層の喜びもあるが、灯笼は所詮佛のものだから、考へれば、あじきない事であるわい、と云ふのである。

(79) 朝夕の間も大工の遅さ九ら

秋の屋 遅櫻のさく初夏の頃は、最も日が長い故、大工が朝仕事を始めて、夕に仕まふ間も長い。といふので、それに遅櫻を假り來つたのである。

東 魚 普請場に遅櫻が咲いてゐる光景は、確かに俳趣があるが、どうも思はせ振りな六ヶ敷い句である。

省 二 表現に少し持ち廻つた氣味がある。

(80) 母の心へひとつ合鑑

省 二 合鑑を作つて、母の心持に一致させ、適應する様にして安神を與へる。―例の古川柳の息子で、母親は勿體ないが欺しよいとなる。

秋の屋 新に合鑑を造るのではなくて、母を瞞着して合鑑を使用するのであると思ふ。

東 魚 合鑑は本當に鑑の事ではなく、合鑑の如くに、母の心持ちを迎へる、母の用心の胸の扉を開かせるといふので、それこそ勿體ないが瞞しよいと云ふのであらうと思ふ。

(81) 臍の緒は松坂に有り若たんな

秋の屋 伊勢松坂の大商店の若旦那が、江戸の支店にてゐるので、その臍の緒は故郷にある事いふ迄もない。

東 魚 何となく可笑味がある。

省 二 「駿河町ほその緒は皆伊勢にあり」と同巧。私などは臍の緒は持ち廻つて居る。

(82) 氣違を淋しく通す京の町

省 二 靜寂な京の町の姿だ。氣違ひが通つても野次馬がゾロ／＼後をつけたりせぬ。

秋の屋 腕久やお夏のやうな狂人ならば、京童に嘲弄さ

れて、歌もうたひ踊もをどるが、乞食のやうな汚い狂人では、これに構ふ者は有るまい。

東 魚 京の人はおとなしい。氣違その者も、騒がしくない者らしい氣がされる。

(83) 櫻川 西瓜の皮も流れけり

秋の屋 常陸の櫻川ならば、落花が水に流れて、風情ある眺めであるが、或る時は西瓜の皮も流れるといふので、これが作者の見附物であらう。

東 魚 贊

省 二 櫻川は謠曲「櫻川」に物語の場所となつて居る『乞食の鐵物拾ふ櫻川』(眉七)もそれか。

(84) うき 秋を 焚て 紛る 八王 寺

省 二 八王寺には炭を産した。「八王寺ふすぶりくさい飯をくひ」(武・八)「我炭にかじけて歩行八王寺」(武・初)物うき秋を炭を焼いて暮す。

秋の屋 古來、和歌では炭竈すなはち炭焼は、冬の景物としてあるが、秋を詠合せたのは珍らしい。

東 魚 紅葉を焚いて酒をあたくむる、と云ふ心持ちを背景にしてゐるのではないか。

省 二 俳諧に於ても冬の部であり、秋とした作は知らぬ。實際は秋李から焼いて、製品は貯藏されたものであらうから、原句が生れたのかもしれない。「炭かまへ最ふない秋を伐くべて」(年籠)。

(85) 女 か 勝 て 捨 たる 光 陰

秋の屋 平の政子、則天武后、女天下となつては、光陰

も廢るであらう。「捨たる」は「廢る」の當字に相違ない東 魚 「すたる光陰」は、世も未だといふ意味合ひであらうか。

省 二 然らむ。世情が衰微するの意、廢るは捨つと語源を同ふすといふ。

(86) 内侍 といへは 聞惚か する

省 二 内侍は女官の稱。凡そ美人らしくも感ぜられ、聞き惚れがしやう。

秋の屋 馬内侍などいふと、美人らしく思はれぬ。

東 魚 一般的には全く聞惚れがする。

(87) 箔代 の 雨 の 舍りも 手向 草

秋の屋 驟雨に遭つて、野寺などに駈込んでみると、大破した佛像修繕の寄進札が出てゐる故、若干の錢を寄進して、手向草にすることであらう。

東 魚 箔代の建立と出かけた坊主が、雨にあつて軒下に雨止みをしてゐる。彼等に軒を借すのも、手向の一つだと云ふのかと思ふ。

省 二 先づ其邊であらう。「箔しろ」の句、「世を捨てきらぬ釋迦の箔代」(眉七)。「箔代が出来て佛の行衛なし」(武・十三)。

(88) 帯 した 妾 明 る み へ 出 る

省 二 不爲體な日常生活振りを示す。「妾帯をやつとこさアしよつてたち」と列べて置く。

秋の屋 日蔭の身で自墮落な妾も、他人の目に觸れる場

所へは、帯を太鼓に結んで出る。

東 魚 〓 私は岩田帯と解してゐた。日陰者の妾も、さあこれからは立派なお腹様になるのだぞといふ心持ちと思つてゐる。

(89) ゆるさぬ路次の夏に破られ

秋の屋 〓 通抜無用の札を出して置いた路次も、夏の宵には散歩する人が多く、その爲に禁を破られるといふのである。

東 魚 〓 夕立などで通抜けを、大目にみて貰ふ連中もあるかも知れぬ。

省 二 〓 通抜無用で、却て通抜けが判つて、夏にその禁が破られる。

(90) もたれた壁のほめく立聞

省 二 〓 立聞は句材に澤山なつてゐる。息をとめ氣を集めて、盗み聞きをして居るうちに、もたれてゐた壁が段々温かくなる。

秋の屋 〓 「ほめく」は少し誇大で、他に適切な語があると思ふ。

東 魚 〓 立聞に、かつとするやうな事を聞いた氣分で、倚つた壁まで、ほめくが如く感ずるのであらう。

(91) 根津のやき物今にすめかね

秋の屋 〓 「やき物」は焼肴のことで、根津のやうな下等の妓樓で、焼肴のやうな上等の料理を、客に出す事は稀有なので、後日に到つても、その意が解し難いといふのであらう
東 魚 〓 「すめかね」は、分り兼ねる。解し難いの意。私
は 根津で焼物を出したが、鯛でない事は確かだが、ありや

一體何といふ魚だつたとの意かと思つてゐた。

省 二 〓 古川柳では「今以て根津の焼物すめかねる」となつて居る。鯉や鮪のへな／＼を擔ひ込むのが普通になつて居るから、さて、あの折りの焼物はと、今に以て考へさせられる。

(92) 宵中で蠅の遊ぶ腰ぬけ

省 二 〓 蠅のいたづら者には、あいそが盡きる事もある背中で蠅が遊ぶでゐても、腰抜けは平氣で居りはするが。

秋の屋 〓 日向に脊を晒してゐる。蹇の爺か婆であらうが「遊ぶ」よりも「つるむ」とする方が滑稽味がある。

東 魚 〓 腰抜け自身が、自嘲した氣分で、この句があるなら一層の哀が深く思はれる。「つるむ」も御尤もだが、露骨に失しはしまいか。寧ろ遊ぶにつるむ事もありと、言外に置いた方がよいと思ふ。

(93) 旅を哀にしたる順禮

秋の屋 〓 御詠歌の聲を聞いては一層旅愁を催すのである
東 魚 〓 意味合は充分受取れるが、あまり平凡だと思ふ
省 二 〓 子供を連れた順禮であつたりすると、一層だ。

前號 (武玉川) 正誤表 (蛭子)

(真)	(段)	(行)	(誤)	(正)
一四	上	一七	遠くから	遠くから
一五	同	三	見當〇ぬ	見當らぬ
同	同	六	前既	前説
同	同	二二	助産	初産
同	下	三	寺小姓	寺小性(原本通り)



行路集

(5)

長野晴濱

斯くある

斯くもまた絢爛な本よ詩や歌は斯くあるものと思はせるに
か理痛めくことは歌はずとばかりにわが空虚さを庇ひたまふか

歸途

胸を張れ首な垂れなと胸を張れば行くての木々に月出でてあり
歌は今日とんと出で來ず宣告の下れるごとし虫の音さみし

發作

歌は今出でくるけはひかしこまり眼を据ゑてあり夜はくだちつゝ
虫の聲遠き汽車の音たゞ更けて出でなんとして歌は出でこず
苦しくも更けくる夜か今の先浮びし歌のかげもあらなくに
我れのこの歌の發作はあすにかも消えてかゆかむ今宵われ寝じ

大阪の古本屋

高尾書店 櫻橋店

電話北七〇〇七番

大阪市西區南堀江通二丁目

荒木伊兵衛書店

支店 朝日ビル二階専門大店

大阪市南區西清水町八番地

古典籍
一般 石川清和堂

振替大阪七三五八一番

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六一番

大阪道頓堀

天牛本店

電話南二七四八・二七四九番
振阪五六六五〇番

趣味の古本屋

尾上菟文堂

大阪市南區墨屋町五番地
但シ心齋橋周防町東へ二丁北側

柳書並古典籍

玉樹香文房

大阪市西成區岸ノ里
松原通一丁目

和漢洋書賣買

更生堂書店

大阪市西成區玉出本通一(玉出驛東)

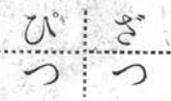


得手勝手 霞乃

或人羊を曳いてゐる男に、其羊は何にするのかと訊いた。「これは鐘に血ぬらんとするので」と答へた。「それは可憐さうだ。羊は止めて牛にせよ」と云つた。幻想力の最も乏しい人の得手勝手。

三日、七日流連をしてゐても貴郎のボケツト・マネーですから云つた風に、少しも咎めだてをせぬ女房を持つて居る某氏「うちの案内は理解がある」と云つて喜んだ。

纏て男に不作が續いた。美衣を纏はず、落ちたる物を拾はざ



る主義の女房には一銭のへそくりもなかつた。男つら／＼思へらく「あゝ山内一豊の妻がほしいなア」

北窓遅春 久流美

日記もつけねば、句も作らない。もう花が咲くといふのに、浮かれる氣もせぬ、四月の朝日さいふのに寒いこゝ／＼眼へ砂煙りをはいるさいふ戸外の景色では散策の氣も起らない。が、金澤の銀座街(片町)の金澤劇場には入江たか子の「からゆきさん」を映寫してゐる。這入らうかと思つたが、先づ映寫時間の五時何分までに一時間以上もあるのので一先づ歸る。

一日だから娘郷子が歸つてゐる。お休みだからヒリの弟を伴つて松竹座へ行くさいふ、十七八なら松竹の映畫もよからう。

風がやんで雨になつた。明日から競馬さいふのにいやな四月天

氣です。(四月一日)

街の横顔 豆秋

難波驛前で、空いたバスへ飛び込むと、「すみませんが故障車でございます」「あゝ停電だつか」と言つて降りました。

バスの中に「お花見は吉野へ」といふのや「洋服の月賦」といふビラが百枚位づつブラ下げてありましたが、「お花見」の方はチギリ取つて讀まれますのに一月賦の方は一向手を觸れる人がありませんでした。

同雅號は改號を 華光

九州の長崎に麻生路郎氏と言ふ人がある。川柳をやつてゐる同名異人も文藝にたづきわる人ならば先輩に對して改名すべきである姓も同じなのは珍らしいが同雅號は十七音律に同想句の多いほかに多い。

短歌、俳句を別々しても、せめて柳界からは同雅名の人をなぐしたいものだ。又同音の雅號も同地方の時は句會などで一寸困る。不真面目な様な雅號の改號もすゝめすると共に上の人々も心得て貰ひたいものである

グレンシャムと鹹 沐天

「グレンシャムの法則だよと鹹が云ふ」われわれ注視の人柳大門氏の句此れはおもしろいと思つた、恠んな硬いものを鹹が云ふの座五でユーモア化してゐるところ流石だと思つた。ドウセツソフアノミ遠巻きにして鳴く蛙の鹹氏であらうか……サー・トマスグレンシャムの通貨流通上の原則なるムツカシイ法則を、人間界に拉し來つて喰ひ下らうとする鹹氏もおもしろい。往年の玉むし誌上で「グレンシャムの法則に尖光は走る」と謂ふのがあつたが、右の句には及ばない。



川柳職業人問題の序曲

- この繪は何んでせう？
 - これが判りませんかネ、僕とこの子どもでも知つてゐますが……ソレ耳をすまして御覽、ワイ／＼云つてるぢやありませんか。
 - 私にはよく聞えませんが、蟹のやうに口から泡を出して旺んに論じてるやうですネ。
 - そうです、アレが川柳の評論家を以て任じてる男です。
 - アノ隣りで見るからに神経質な男が大きな團扇で煽いでゐますがアレは何をしてゐるのです。
 - アレが有名な陰險士で、柳界のオダテ係なんです。
 - へへエー。そんな係まであるんですかネ。驚きましたな。向ふの方に一ト地りになつてワイワイ云つてゐるのは……
 - アレは座談會ですよ。
 - その後ろで鉢巻をして空を見てゐるのは……。
 - ソレはその一團の棟領株で日和見をしてるところですよ。
 - 問題はなか／＼難かしそうですネ。
 - 六ヶ敷いと云へば難しいし、むづかしくないと云へばむづかしいのです。要するに人間さへ出来てればなんでもない問題です。
 - そのいきさつについて詳しく談してくれませんか。
 - 承知しました。しかし立話も出来ませんから、あそこの喫茶店へでも行きませう。
- (川柳職業人問題について、昨夏來、全國各誌にあらはれた賛否兩様の記事に對する検討を次號以下途號發表することにした。期待を乞ふ。)



湖南と好尚

高尾亮雄

毎日正午すぎだ。中之島のつい近くの辨當屋の二階借りの獨り住居。

社説になる論文は二三の案が、チャンと腦裡にあつて他の新聞を五六種調べて、それがないものを一氣に書いてしまわれるのであるから、前後二時間もかからないといふ早業、それがいつも／＼名文で一世を指導するほどのものであつた。湖南翁ほどの名實の人物は、恐らく今後も出ないであらう。

内藤君のその大切な函呂敷包みを、ある時、悪戯をして私が隠した事がある。一寸おもしろかつたが、勿論すぐに分つたが、私に對するその仕返しを振つてゐる、内藤君は書を能くして誰れの筆跡でも眞似る事のできる人だつたから、私の偽筆の手紙を作つて私の家内に送つたものだから俄かに家庭騒ぎだ、本人の私が見てさへ、眞偽が判分しないほどだから、實に困つてしまつた。

こんな事も、今は思出での種となつてしまつた。今生存していられたら、きつと文化勳章にあづかれる人であらうに惜しい事をした。

古く大阪朝日の大先輩たちの多くは、すでに物故してしまつた。礎野秋渚、西村天因、内藤湖南の諸氏その他にも……たゞ獨り生き残つたやうな木崎好尚氏のため、後身者相寄り一夕を懷舊談にすごしたのは、つい最近の事である。大阪文化のために盡した各先輩たちの逸事逸話が、綿々糸糸の如くつゞき、そのうち大朝在社中の湖南内藤氏に關するところのみを記しても趣味さらに新たなるものがある。以下好尚氏の思出談の一節——

湖 南 と 好 尚
内藤君は何にでも能く通じた方で、あんな偉る學者は近ごろ絶無だるふ。詩文はもとより和歌をもよくされた。いつも出版社するのは午後四時頃で、必ず片手に大きな風呂敷包みを提げてゐられる。元來が背の低い方なのに、その包みが一層カサ高く見え

る。中は何かさいふさ、その一冊だつて國寶にも比すべき貴重な本さ、詳しい支那の地圖の類である。別にそれを社では擴げて讀むのではないが、餘り大切なもので家に置いてくるに忍びないらしかつた。當時、日清日露とついで起つた滿洲における戦争その解らない地方や人名を内藤君に聞くとすぐに教へてくれる。陸軍だつて外務省だつてまだ持つてゐないほどの完全な地圖であつた、内藤君はごころから手に入れたものか不思議な事だつた。

内藤さんが社にくるさ、すぐあさから大きな三重の辨當箱が使ひにもたされる、まるで大工共が喰ふほどの分量、朝食も費食もぬきでこれが一日中にたゞ一食であるらしい。尤も内藤君は夜中三時四時ごろまで讀書して、それから寝るから、起きるのが

関西随一 ぼたん

中將姫の遺蹟

當麻寺
石光寺

觀賞宴遊券 一圓三十錢

アベノ橋・當麻寺行 關引社 遊券付
(發賣期間 自四月二十日・至五月十日)



ハルキョウ

あへの橋より 割引 遊券	はびき山 五十錢	高鷺玉山 七十五錢	石川飛鳥玉山 五十五錢	河内岩屋宮 六十五錢	上岩ノ宮 八十五錢	二 嶽山 八十錢	河内國境水越峠 八十五錢	綿公遺蹟巡り 八十五錢	金剛葛城登山 八十五錢	金剛 剛
-----------------	----------	-----------	-------------	------------	-----------	----------	--------------	-------------	-------------	------

アベノ橋・當麻寺行
一圓三十錢 遊券付

五月 中 毎日 曜日 アベノ橋 發車
午前八時 アベノ橋 發車
この列車にて 右の印 コース に 參加の
方 に 限り 記念 團體 寫眞 撮影 の 上 一 枚
宛 進 呈 致 し ます

橋のべあ

一三三 寺王天話電
番三三三
三三三

大鐵電車

川 協 の 頁

川・協の仕事はエスカレーターのように、挽みなく前進を續けて居るので御安心の上、氣長かに御支援願ひたい。大分基礎工事がすすんで来たのも、柳界の將來を深思されてゐる諸君の御後援の賜ださ感激してゐる。川柳人協會

★全國川柳家交驩大會

第四回全國川柳家交驩大會は主催地のオール名古屋川柳團の熱誠なる努力によつて大盛會裡に終了し、感激の廿餘時間を過ごした。(詳細はオール名古屋川柳團の會報に譲る)

★次の交驩大會に

就いて

オール名古屋川柳團主催の全國川柳家交驩大會は四月十八日盛大に舉行され、その夜、覺王山の泉竹で開かれた大懇親宴に先立ち、次期の交驩大會と其の主催者が附議せられたが、二千五百六十年には東京でオリンピック競技が行は

れるのを機會に是非とも東京で開催したい開催して貰ひたいと云ふ意見が多數であつたが、それまでに一回開くか開かぬかが問題となり、開くとすれば金澤で開いて貰ひたいと云ふ希望がこれ又多數であつた。この問題は出席者のみで決定し得られない事情にあるので、第四回の主催地、名古屋の殘務の一つとして金澤への交渉方を一任して盛宴に移つた。

其の後、大窪文芳氏が入澤して、非公式に金澤の川柳家に諮つたところ、非常に乗り氣で、來る五月十五日の石川縣下の大會席上で第五回全國川柳家交驩大會主催の件を提議し、これが賛同を求め運びさなつたさうである。

★各地の吟社へお願ひ

川・協の例會では川・協會員章の提示によつて會費の割引を行つてゐるが、全國各地の各旬會でも川・協會員には特に會費の割引を

お願ひする。割引實行を應諾された吟社は御一報を乞ふ。本欄に紹介して會員の出席を促す事とする。

★寫眞を募る

遠隔の地にあつて、親しみを早めるために會員の寫眞を掲げたいので近影の惠送を乞ふ。

★會員に告ぐ

遠近各地の會員で來阪された時には是非共寸閑を割いて本會を訪問されたい。協會に對する認識を深めるためにも特にお勧めする。

新名譽會員をお知らせいたします。

齋藤 旭映君 (名古屋)

伊志田孝三郎君 (同)

名譽會員池田可宥氏夫人追善川柳會が五月二十二日正午仁川府宮町高野山遍照寺に於て營まれる。



浪 一 路 集

募集句

小林不浪人選

突き當りさうに浪人ふと手
浪人にすつかりなれた懐手
浪人をしてから金の有難味
浪人の曆イラ／＼めくられる
浪人は徳利枕に寝て仕舞ひ
卒業後三年厄介者にされ
浪人の時を床屋で思ひだし
御機嫌を取ると浪人怒り出し
浪人は珍しい事さがしてゐ
浪人をしてから世間せまくら
浪人が四五人事件起りさう
浪人の氣樂さ言ひな事が言へ
浪人は植木の前でうつされる
浪人の小判に替へる妓のいのち
浪人に開けば素適な案が有り
浪人をしてから政府いやにな

斗風 浪人のそれから村で名譽職
悪源太 大望のある浪人が戀をされ
慶一 浪人のしばし佇む橋の上
ぎん 政變の聲浪人が動きかけ
菊路 小説の浪人みんな腕が立ち
静水 浪人をして青バスに乗りな
宙芥 榮轉へ浪人の友も来てくれる
柳笑 無精髭いよ／＼浪人らしくな
錦溪 浪人の個性だん／＼ニヒリスト
不夜城 浪人になつて煙草の名が變り
古心 浪人をしてもきつ／＼晦日が來
葉留路 陽の這入る頃に浪人動き出し
岩石 浪人の眼になやま／＼花が咲き
鮎美 一時の戀に浪人ねそびれる
鐘生 浪人の月を仰げば青白し
嵐峰 釣竿をた／＼浪人記者に逢ひ

海 業
一 生
同
紫 香
同
水 客
同
龍 城
同
石 燈 籠
同
東 狂 子
同
蒼 梧 樓
同
都 之 介

上京をする浪人にカメラ陣
小ぢんまり住む浪人碁を圍み
組閣なるとこで浪人夢が醒め
浪人も煙草代だけ持つて居り
浪人はうどんの安い所も知り
浪人になつて云ひき事が云へ
浪人は天下と云ふ字つけたが
移り行くものに浪人眼をみは
浪人をするには若い紺緋
友情に泣く浪人へ煙むる雨
浪人は青春の血をもてあまし
映畫なら浪人型も良けれど
浪人に世間はせまく見える
妾宅を浪人憎く見て通り
浪人に日本があまり狭すぎり
大小の外は浪人賣り盡し
浪人が仲裁に出て鼻がつき
浪人をしてから母が有難し
浪人の二人意見が一致する
逆境の中に浪人信じ合ひ
浪人に晩酌だけの魚が釣れ
同情をされて浪人腹を立て

同 光 路
同 潔
同 春 集
同 新 水
同 朔 風
同 向 上 庵
同 岡
同 文 庫
同 浪 二
同 葉 光
同

浪人を淋しがらせる花吹雪 同
 浪人だなどと野心のある閣下 鳥雀
 浪人の日に日に主義の變る者 同
 浪人は或る日ベンチで友が出來 同
 浪人へ次第に町の子がなつき 美知夫
 浪人をして尺八が役に立ち 同
 小春日を浴びて浪人晝寝する 同
 浪人へ天下泰平續くなり 同
 浪人の襟首寒く傘を張る 曉童
 打算的な戀を浪人考へる 同
 浪人をしてから妻の美しさを 同
 食へるまで浪人座と食ふ氣を 同
 浪人といふ氣安さの糸をたれ 同

五 客

浪人が畫のやうに行く芒原 古心
 浪人は噂の中へ戻つて來 朔風
 浪人のたもと淋しい錢の音 鳥雀
 浪人の屏風をたてゝ寝てる也 鮎美
 戸締りもなく浪人は不在なり 文庫

浪人は華かだつた過去をもち 斗風
 人 地

襟 足

襟足へ長いきせるの似合ふなり 鳥雀
 苦勞してゐると襟足の見ゆられ 柳笑
 床屋から襟足寒う戻つて來 菊路
 阿呆らしいと襟足斜に見せ 鐘生
 湯氣にゐる襟足今日は嬉しき日 水客
 襟足へ京都の風はつめたすぎ 岩石
 襟足を見せて柱へ少し酔ひ 紫香
 襟足へまだ疑のある瞳なり 都之介
 戀に似たものを襟足から感じ 同
 嫁ぐ日の襟足にみるはれやかさ 朔風
 お俠んといふその襟足に領かれ 光路
 襟足の美しすぎる不倅せ 葉光
 足音へ襟足少しあらたまり 文庫
 さて興もなき妻の襟足 曉童

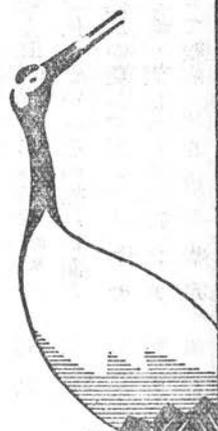
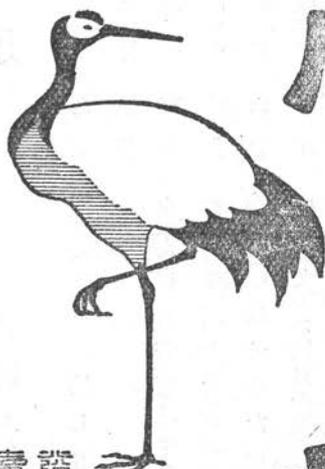
刀屋の前で浪人躊躇する 美知夫
 天
 浪人の心機一轉旅に立ち 柳夢

山本丹路選

襟足へ合せ鏡の嬉しき日 鮎美
 五 客
 少年へ襟足の香がきつすぎる 一生
 襟足のきれいな人とバスにゆれ 朔風
 襟足を吃驚させた雨雫 古心
 嘘ついてゐる襟足の美しさ 葉光
 襟足の傷も淋しい酌婦でぬ 斗風
 人
 襟足へこそぼろ虫がとまるなり 鮎美
 地
 剃刀が襟足へくる恥しさ 浪二
 天
 襟足を剃らされてゐる日曜日 朔風

酒 白鶴 清

ハクツル



元發 嘉納合名社

天奉・連大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

伊豆椿 灰皿ポマード

植物性 五十銭

頭髮のホルモン劑 (コレステロール配合)

御使用後ごても
スマートな灰皿
になる新案容器!

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ
明らかな青年美を創る伊豆椿ポマード

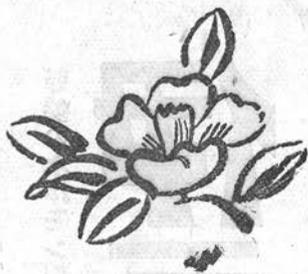


美髪は
紳士道!



伊豆椿香油本舖
大槻彩芳園

全國百貨店、有名化粧品店
薬店、小間物店にあり



柳界展望

全園川柳界のこゝ、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

催

- ▲本社四月例会は六日夜誓得寺で開催、森東魚先生に講演の勞を煩はした。花に浮かれる頃で、出席されたのはいづれも眞摯な人達であつた事は勿論である。
- ▲阪大川柳會の四月例会は二十六日夕惠濟館三階で路郎師を迎へて開催された。
- ▲川柳同人社(京都)主催の卯月例会は四日仲源寺で催された
- ▲川柳國發行所主催の朝日新聞社亞歐聯絡記録大飛行聲援川柳會は三月廿七日朝日ビル五階A

B C 集會室で開催。十八日は造幣局觀櫻川柳會をひらかれた。

▲ふあうすま大阪の會は四月六日新町橋停留所前のねぼけ堂階上で開かれた。

▲京都川柳聯盟主催の全京都春季川柳大會は四月三日正午圓山公園の佛教兒童博物館階上で開かれた。

▲本社廣島支部四月例会は二十三日廣鐵俱樂部で開催。

▲本社吟行は四月二十五日雨天決行、會するもの路郎師はじめ里十九、艸樂、かほる、新水、豆秋、いわなの諸君。汐の宮温泉

の新縁を賞で作句、歡談に一日を過ぎた。

▲三味線草後援會は四月廿三日夕天満天神龜の池で催された
▲八幡くろがれ吟社では「くろがれ」百號記念句會を五月五日夕六時八幡中央區大谷人事相談所に於て開催される。

▲住友金屬鑛業所親友會(尼崎)の四月例会は十七日夜、路助師と折から來阪中の福田山雨樓君を迎へて和やかに開催された。

創刊と廢刊

▲松本虹二君(埼玉)によつて「鶏の耳」の第一巻が發刊された
▲主幹田中五呂八君を失はれた水原川柳社では、四月十五日その追悼號を發刊された。

消息

▲麻生路郎師は四月十八日名古屋の川柳交驛大會に山雨樓君と共に出席された。
▲福田山雨樓君(權濱)は四月十

六日來阪、大鐵の諸君と古都奈良に一泊、十七日本社訪問、路郎師、艸樂君と歡談、當夜、師と名古屋の交驛大會に赴くべく出發された。

▲長崎柳秀君(御影)は三月下旬數名と熱海から三原山、下田箱根宮の下を経て歸られた由。

なほ四月十日頃發病され直ちに入院手術、間もなく快癒されたので廿六日の阪大川柳會は本復祝の會となつた由。

▲橋本綾雨君は注事のため三月下旬郷里石川縣へ歸られた。

▲松島みどり葉君(石川)は商用のため來阪、三月廿一日本社を訪問された。

▲濱田久米雄、福岡葉留路(廣島)の兩君は、三月二十七日の兵庫支部記念句會に出席された

▲本誌マンガセクションの新人マンガトリカの樋口ヒロム君が五月から東京麹町「帝國海軍社」の漫畫記者に目出度就職、四月

二十六日の夜は湊町竹葉亭で我が社の送別宴にのぞみ、廿日夜青い春廣で路郎主幹等の激励をうけて上京された。

▲本社三池橋支部では、六年ぶりで大連から歸國された廣瀬三碧君を迎へて、四月十九日夕南地琴福喜で小集を催された。

▲妹尾戀人君（大阪府）は市電に勤務してゐられるが四月一日から、鶴町から天王寺に轉屬された。

▲業田一二君は四月一日附をもつて名古屋から金澤運輸事務所經理係長に榮轉された。尙同地の安川久流美君と久しぶりに歡談された由。

▲四月十四日松江市の大火に際し、本社は直ちに御見舞の打電をしたところ、支部幹事勝谷山川兒君から川柳家に被害なき旨の答禮に接した。

▲安川久流美君（金澤）は四月十四日午後五時金澤J区局より

同局七周年記念募集川柳十秀を感想と共に約十二分放送された。尙四月號の柳誌（軍配）に柳壇雜録を四回に亘りて執筆された。

同局七周年記念募集川柳十秀を
路郎師と歡談された。
▲阿部閑生君（大阪）は四月八日附で臺灣からの旅だよりを頂く

船の旅

温泉へ

別府線
勝浦線で

大阪	五時
神戸	同六時四〇分
和歌浦	同九時四〇分

(一日で船中、ドロ游覧)
(翌早朝歸着)

大 阪 商 船

一呈進書内案一

▲馬場浪二君（丸龜）は四月二
十四日來阪、同日山本葉光君を
訪問され、十年の知己の如く語

▲本社御池橋支部の夢裡、青兒
の兩君は日本樂器店の慰安會で
四月十一日洲本に遊ばれた。

慶 弔

▲岸本水府君（川・協名譽會員）
の宅では、三月廿三日男子を安
産され、幃君と命名された由お
喜び申上げる。

▲本社句會に、近作欄に閑秀
作家として活躍されてゐた中川
シナ子女は、四月二十二日長逝
された。謹んで哀悼の意を表す
尙同女を失つた御池橋支部では
左の悼句を寄せられた。

惜しまれて三十路の若さ
春さ逝く
徒花の散りし葉末はもの悲し
淋しさの一入増さむ春の雨

青 兒
夢 裡

▲藤本福造君（川・協名譽會員）
の嚴父は七十五歳を以つて永眠
された由謹みて御悔み申上げる
▲池田可宵君（川・協名譽會員）
の夫人イナ子女は四月二日午後
八時半逝去された由、遙かに哀
悼の意を表する（五四頁へ續く）

川・雜・案・内

六號活字 四角 三行 金五十五錢、一行増すと
 改題に金十銭、但し前金付手付可也、その他
 改題に金十銭、但し前金付手付可也、その他

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への投句は新らしく出来た樹形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利で句の見損じもなく相方に好都合であります。自分の句を尊重される意味からでも御使用をおすゝめいたします。送費は本社で負擔いたします

八十枚綴 一冊 金十五錢
 同 二冊 金廿五錢
 御申込は川柳雜誌社へ
 〓切手代用も可〓

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入二拾圓・額二拾圓
 小物五圓・短冊參圓
 御申込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第二巻より第十一巻まで

各一卷 金壹圓五十錢
 第十二巻及十三巻 金參圓
 送料大阪市内 一冊六錢
 市外 一冊廿四錢
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

日日柳壇

大阪日日新聞の柳壇が復活しました

課題「カステラー」五月十五日
 選者 麻生路郎先生
 用紙は官製ハガキ

宛先 大阪市西成區玉出本通三ノ三六 川柳雜誌社 麻生路郎先生（日々柳壇と記入のこと）

懸賞川柳

課題「單衣」五月十日

「船」六月十日

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏
 秀逸數句に瀟瀟を呈す
 宛先 大阪市西成區玉出本通三ノ三六 麻生路郎氏方
 化粧新聞社柳壇へ

御禮

第四回全國川柳家交驛大會へ出席の際は種々御配慮にあづかりまして有難う存じます今後ともよろしく御風交の程願上げます先は誌上を以て御禮まで 敬具

オール名古屋川柳團各位
 全國參加川柳家各位

川柳雜誌社 麻生路郎

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌 毎月一日發行 一部廿錢・送料一錢

川柳俱樂部

東京市牛込區拂方町一四 川柳俱樂部社

川上三太郎大谷五花村共宰

川柳研究

一冊金廿一錢（郵税共）
 一年金二圓四十錢（同）
 東京市王子區上十條町八五〇
 發行所 川柳研究社
 振替東京九四〇四六番

川柳きやり

菊判每號七十數頁
 毎月一日發行一部廿五錢
 東京豊島區高田本町二ノ一四
 六八 川柳きやり吟社

川柳松囃子

毎月一日發行一部廿錢（税共）
 福岡市下店屋町九

川柳拳骨吟社

菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店



エツサツサーもいゝけど何かほかの物を掬つてくれ

泥鰌ばかりぢやア飽きたよ

子供にラヂオ体操で起る癖をつけたら
不可ません

道で轉んだ時に全く手古摺ります

主人の養母と支配人とが、どうも臭いと云ふ噂がある

ワキガがですつて

家内が留守になると、つくづく有難味

俗世間から

|| ああ成程、それもそうだな集 ||

小林 茗 八

が判る

小供は寝てゝ卵焼を食ふし、僕は僕で風呂の中でビールを呑むし

バナナを買はうつて人が澤山待つてたけど

喋り通しに喋つてたから賣る暇がなかつた

猫の糞でも拾つたら交番へ届けなさい
届けないと猫婆々罪を構成するから

この病院の前はルンペンが自動車に轢かれる場所だぜ

一番いゝ食事を患者に喰はせる病院だからよ、覺えとくがいゝ

今賣出した睡眠剤の賣れ行きは素晴しいもんだ

無料火葬券、無料葬式券附つてんで

僕の家にはカセイフが三人居る

家内が家政婦で、家内の母が加勢婦で家内の妹が假性婦さ

料理の學校を卒業すれば一人で喰てゆける

料理のたべ方まで教へるそうだから

野犬狩の標語を募集したら

「犬も歩けば棒に當る」が一等になつた

貧乏人の娘は性に目ざめるのが早い
金持のとこの娘は朝寝するから、どうしても目ざめるのが遅くなる

幼稚園の先生は、どうも嘘をつくの
で困る

こゝまでお出で甘酒進上なんて

本當に効力のある毛生薬は

縷の内側に毛が生えてるそう
だ

競馬で儲けた金なんて駄目なも
んです
ね

媿が貯金しちやつたもの

兄貴は俺より歳が上だつて云ふ
けど

あの双兒はどつちも嘘つきだ
から判
らん

開業したばかりで一日に千人
以上の患者が押し寄せるそう
だ

淋病専門の若い女医者なんだ

無銭飲食者の常習者を叱る時
の文句は
誰でも先づ初めに

金もない癖に無銭飲食する奴
がある
かッ

アサヒビール



大日本麦酒株式会社 社内御用達



編 輯 綜 横

▼川柳だ。川柳だ。明けても暮れても川柳だ。花はハラ／＼も葉櫻だ。それでも、私にや川柳だ。ケン／＼伸びよ、「川柳雑誌」お手々繋いで川・協三昧。

▼四月は随分と馬力をかけた。揮毫に、執筆に、句會に、名古屋への旅行に、そして歸つてから一寸疲れた。しかし、疲れたからと云つて、怠けては居られない。ひたむきに編輯と四つに組んで、書齋へ籠城してゐる。

▼編輯位厄介な仕事はない。ココは何、ココは何さきまつてしまふと感激が稱薄になる。エディターの感激が薄れることは讀

者のすべてが感興を殺されることである。いつも新鮮な匂ひを漂はせるためには、常にエディターの緊張が必要だ。と云つて無闇に小刀細工をする、讀者を戸惑ひさせてしまふ。編輯の苦心はホントにやつて見ないで判らない。今度全體の組の上には大した變化はないが、「近作柳樽」を拙稿「川柳名句評釋」と振變へ、廣告の散兵による感じの異色を考慮に入れて見た。斯くすることによつて廣告も又一つの色彩であることを思つたからである。

▼いつも葉櫻のころになる、天折した六厘坊のケリ／＼頭を思ひ出す。多年六厘坊忌を修して来た私も、六厘坊を知らぬ人たちのことを考へ、六厘坊忌は不朽洞で開きたいと思つてゐる

▼高尾亮雄君から、隨筆が届いた。内藤湖南の風呂敷包なんといゝ題目だ。

▼小林若八君の「俗世間から」は前號の續稿だ。御愛讀を乞ふ▼「ざつびつ」欄へは霞乃、久流美、豆秋、葉光、沐天の諸君が響を列べて執筆。小雜筆だが何れも面白い。せい／＼みんな書いて欲しい。ページはまだまだ割いてもいい。

▼山雨樓君が十七日に来てくれた。いろ／＼打合せがあつたので、待ちに待つてゐただけにうれしかつた。日の暮から尼ヶ崎の會へつき合つて貰ひ、相携へて名古屋の交驛大會へ出席することにした。驟で山雨樓君が緑雨君の勤先へ電話したので、緑雨君が一寸の寸暇を得て見送りに出て来た。プラツトでは梅子女史の見送りをうけた。そして東魚君も同車したが別々に立往生で、梅子女史が連絡係をつまめとてくれて、漸く東魚君が洗面所に立つてゐることを知つただけ。名古屋まで顔も合はさず

(四三頁より續く)

改 號

▲酒見白水君は洛水

轉 居

▲植木鬼佛君(東京市赤坂區丹後町三〇番地) ▲番地變更森井荷十君(東京市下谷區坂本町一丁目六番地三號) ▲高澤一浪君(布哇縣オアフ島ワヒアア郵函三三) ▲生田翠夢君(大阪

市東區久寶寺町四丁目二〇番地ノ一一) ▲植山九天君(廣島市東雲町五七〇) ▲古家野天風子君(神戸市林田區千歲町三ノ四九) ▲安川久流美君(金澤市石坂與力町一五)

其 の 他

岩野若三郎氏(本社客員)來阪。 ▲川柳芥子粒吟社(東京)では四月號を以つて五周年記念號を發刊された。

一睡もせずであつた。川柳でなかつたら、僕は引き返へしたところだ。
▼新派の波多積君が亡くなつた私が明治三十一年に大阪へ出て来て、船場尋常小學校の四年に編入學された時の同級生である

から、おそらく、一番古いクラスマートの一人であらう。同君が藝術座へ這入る動機をつくつた僕だけに波多君の死は淋びしい氣がする。最後の舞臺は「良人の貞操」の専介だつた。

▼改組後の十一冊目を世に送る
（路）
ここが出来たことを感謝してゐる。大號はいよゝ十二冊目だ斃れてのちやむの路郎のガンバリズムがいよゝますゝ發揮されるであらう。諸君の熱烈なる應援を切望して止まない。

川柳 五月例會

鉛筆持參

夜七時

6

五月

會場

兼題

柳話

會費

誓得寺（電南四八八六）
大阪市電清水町停留所一丁北ノ辻西入

「蚊」三句 路郎選
「素顔」三句 丹路選

無題 麻生路郎氏
三〇錢（川協會員章提示の方は二〇錢）



川柳雜誌社

大阪玉出本通三・電話天下茶屋二五七九
幹事 里十九・豆秋・白峰・没食子・喜山

★社告

▼支部選者として左の二君を推薦する。（本社）

大鐵局支部 山本 喜山君
廣島支部 濱田久米雄君

▼爾今、本社例會案内の倚人的通知を廢正し、毎月誌上に發表して通知に代へることをした。

五月例會の詳細は上掲の廣告を参照されたい。

聖女へんれ・あけ

沖野岩三郎著

孤兒の境遇を克服して勉學し遂にへれんの師となり、全世界を驚嘆せしめる大事業を成し遂げた、さりぶあんの獻身的生涯が、非常に平易な美しい文章で、子供

でも解るやうに書かれてある。
四六版三三〇頁定價一圓貳十錢
（送料十四錢）

東京市神田區神保町三 金星堂

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく階書「川柳雜誌原稿」

と封筒に朱記の事
▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十四卷 第八號課題

六月一日締切
(十句以内)

海 大島 濤 明 選
會 計 橋 本 綠 雨 選

第十四卷 第九號課題

七月一日締切
(十句以内)

忘 物 高 須 嘸 三 味 選
仲 人 朝 田 新 水 選

每 號 募 集

近作柳樽(十種句) 麻 生 路 郎 選
各地柳壇(會報)
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

價 定

一 部 金三十錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

料 告 廣

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○謄代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年四月廿五日印刷
昭和十二年五月一日發行

第十四卷 第五號
(毎月一回一日發行)

禁

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎

無

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

斷

發行所

川 柳 雜 誌 社

轉

電話天下茶屋二五七九番
振替 大阪七五〇五〇番

支 社 東京市蒲田町女塚町二〇三
川 柳 雜 誌 社 東京 支 社

店 書 捌 賣

(大阪) 大賣捌大寶書店 參文社 明文堂 朝日ビル書店
其他 市内各書店(東京) かん東京堂 かん巖松堂 やつ吉岡書店
あたま玉孫堂 紀伊國屋 三味堂(神戸) 米田寶文館(函館)
石塚(京都) 三宅(名古屋) 辭觀堂

にきび
とり

美顔水

▲ニキビ吹出物に
第一等の良薬!

ニキビ吹出物ふきでものにこれ程ほどよく効く薬はない
といはれ、種々いろいろな薬や方法ほうほうで失望しつぱうされた
方かたでもこの薬くすりの効能きぬゑには満足まんぞくされます。

▲美容薬びようやくとして

この薬くすりは美容薬びようやくとしても非常ひじょうに優すぐれた効
果くちかがきり男子方だんしがたにも婦人方ふじがたにも廣ひろく賞用しょうよう
せられてゐます。



大阪三越開設

三十周年記念

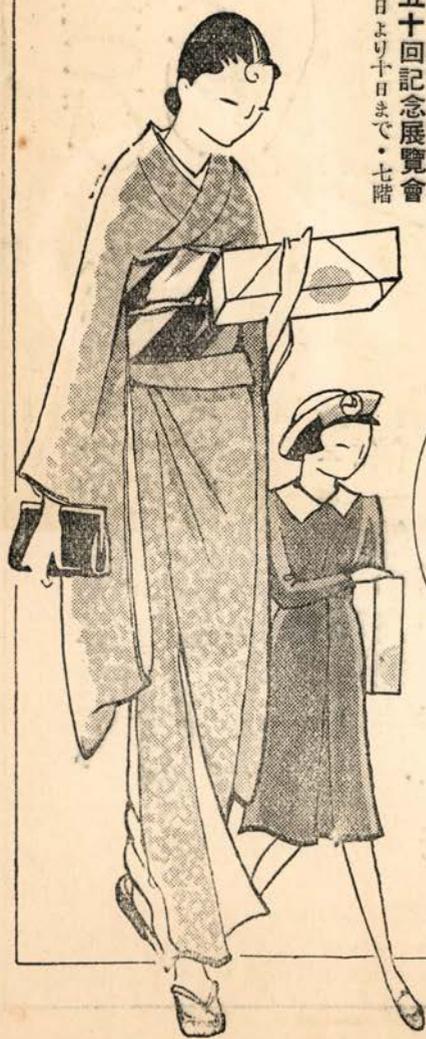
歡び重なる
五月の三越

本年五月一日を以て開設三十周年を迎ふるこゝとなり、顧みて多年の御懇情只々感激の外なく、五月の三越は種々の記念催しに、記念賣出しに、御禮の眞心をこめて、御來駕を御待ち申上て居ります。

店内改築竣工

中央ホールを中心に、店内の大改築竣工
明瞭新鮮味を多分に盛り、全く面目を一新いたしました。

三彩會第五十回記念展覽會
三日より十日まで・七階



大阪 三越 高麗橋

昭和12. 5

大正十三年三月三日第三號郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和十二年四月二十五日印刷納本 昭和十二年五月一日發行

川柳雜誌

(第一六〇號)

定價金參拾錢

送料壹錢